1. 工場立地における環境保全林形成の意義

車輌製作工場における二輪車，四輪車の大量生産のように，各種の工場，製作所あるいは新製品を開発するための研究所さらには新製品の性能をテストするプルービング・グラウンドなどは，それぞれの本来の生産，研究活動という目的をもっている。しかし，最近の大規模な工場に見られるように施設，サイトが大きく，しかも広い面積を占めるばかりでなく，しばしば関連工場や施設などと共に集積の効果をもとめて一大産業立地やコンビナートを形成することが多い。

それらの工場では，従来工業的な生産性を高め，さらに経済効率をあげるための目的に対して，非生物的材料による技術革新や新製品開発のため精力的な研究，努力が集中された。その結果，わずか20～30年の間に我が国の工業製品は質量共に世界のトップレベルに達している。

反面，1970年代に入るや否や，せきをきったように公害，自然破壊などの環境問題が世界でも，もっとも深刻な問題となった。

国，地方公共団体，企業，一般市民も含めての努力によって，個別の公害対策への対応が続けられた結果，技術的な発生源対策は，ある程度の成果をあげてきた。また最近のエネルギー危機や経済の不安は，早くもすべての環境問題を克服したかのごとく，次第に忘れ去られようとしている。

しかし，現在と同じような経済生活を享受しようとするかぎり，さらに少しずつでも向上させようとすれば，必然的にある程度の自然開発，さらに工業生産を高めることは，人間の，そして国民の大多数の願望として進められてゆくだろう。すでに局地的には産業砂漠化しかねない現状では，今まで以上に物理，化学的な各種環境阻害要因に対しての公害防止策はとられなければならない。

反面，くり返し本報で強調されているように現代の環境の危機，さらにグローバルには文明の危機とは，地球上における人間の生態学的な位置の再確認を強要されている時代であることの認識が欠除しているところに秘められている。我々が基本的には生物社会の一員であり，均衡のとれた生物的環境，生物社会の多彩性，それを支える自然の多様性の持続的保証の枠内でのみ，人間は人間固有の能力を発揮することが可能である。

したがって，単なる発生源対策だけでは現代の環境問題の本質は解決しない。他方で，人間のいわば生命の共存者ともいうべき，そこの住民が長い間共存してきた郷土林，すなわち，多くの場合，現在の潜在自然植生を基本とした生態学的な環境保全林の形成は，もっとも重要で，焦眉の課題である。一見迂遠に見える，幼苗のポット苗や種子，いわゆるドングリを植えて創る生きた環境創造こそ，産業立地が将来にわたって環境問題を克服し，持続的な発展が保証される基本課題である。

とくに新しい工場立地においては，工場建設の計画段階から，環境保全林の形成を十分の面積

をもって計画する。国，地方公共団体，地域住民も，緑豊かな環境を創造するための共通の基盤で積極的に支持し，たがいに協力して，自らの生存環境の創造を実行すべきである。

とくに重要なのは，各種の工場，製作所，研究所あるいは公共施設が，いきなり民家と隣接する接点にできるだけ広い幅の境界環境保全林を形成する。このような生きている環境変化の指標，警報装置であり，環境浄化，災害防止などの役割を果す環境保全林の形成は，もっとも意義のある，第一に着手されなければならない対策である。

新しい工場立地の選定，建設計画に際しては，サイト（敷地）内や周辺に残されている自然度の高い，多層群落の森林はできるだけ残す。現存植生の自然林や自然に近い植生の保全，環境保全林としての利用は，一見保守的で，もっとも先取りの自然保護，環境保全施策といえる。

また埋立地などの無植生の裸地に環境保全林を形成する際には，表土の保全，復元を行う。環境保全林の形成を創造すると同時に視覚的な美しさも加味した林縁群落すなわちマント群落（Mantelgesellschaft）を環境保全林が，道路，裸地，芝生などの開放植生域と接するきわに帯状に形成することが好ましい。

以下に，さらに各工場，製作所，研究所などについて，環境保全林形成のための具体的提案を，本報第一部の植生調査，植生図化の研究成果を基礎に考察されている。